

進学塾より注目される

「生きる力」を伸ばす塾

子ども同士で遊ぶ機会が減ったり、親の過保護でひ弱な子どもが多くなったといわれたりするなか、自律能力や協調能力など社会生活で不可欠な「生きる力」が脚光を浴びている。こうした能力を養うことを主眼にして、最近人気を博している12の塾の魅力を探った。

本誌・鈴木 豪

本誌委嘱記者・田原 寛

「学歴以上」を求めめる社会と親 人生に差がつく3つの能力

「高学歴だが職場で伸びない」「新しい仕事になかなか適応できない」——こうした壁に突き当たっている人はいないだろうか。

何が足りないのか。今日の仕事で求められるのはコミュニケーション能力、行動力、論理的思考力などだ。低成長で、自ら仕事を創造していくことが求められるような社会では、学歴より、こうした能力の差が如実に「人生の差」となってしまう。

また、成熟社会となり、成功や幸せの定義が多様化しているからこそ、こうした能力を磨く必要がある。デルタスタジオ（130頁参照）の渡辺健介代表は「日本人の幸福度が低い理由は経済的理由ではなく、『自己実現』と『人とのつながり』、この二つが低いレベルにあるから。これらを向上させる能力を養うべき」と指摘する。

こうしたことを痛感している親が増加して、子どもには学歴だけではなく、生きていくうえで大切な能力を取得させたいと考え、知能開発や体験学習といった教育法に関心を寄せている。

親が子に養わせたいと考えている能力は、主に3点。①コミュニケーションが取れ、集団とも調和できる協調能力。②論理的に物事を考えられ、自らの意見を発信できる思考能力。③目標や志を持ち、自ら一步を踏み出せる自律能力。ひと言でいえば、基本的な「生きる力」ということになるだろう。

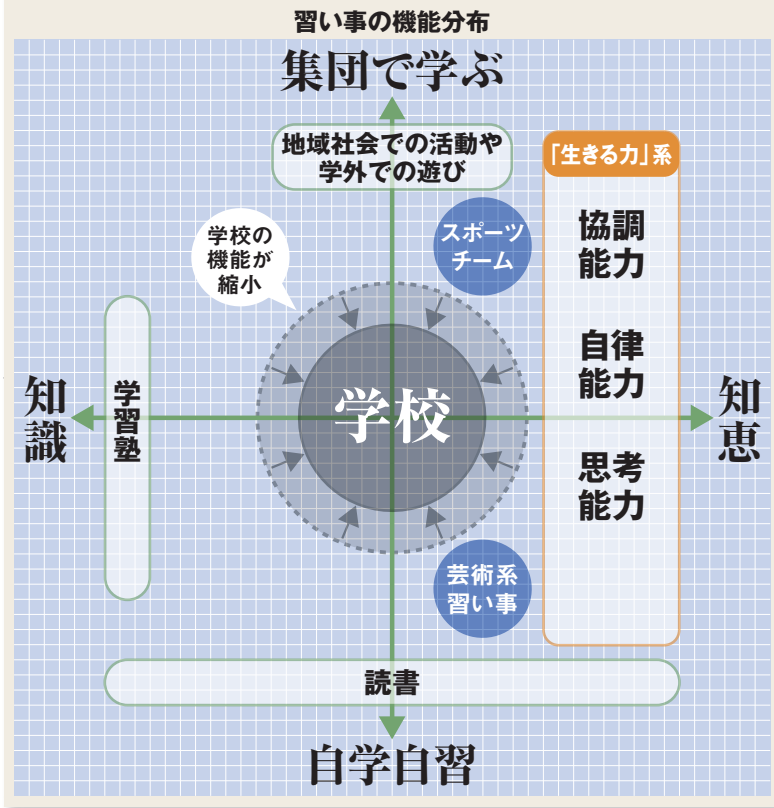
で は、どうすれば子どもに生かせる力をつけることができるのか。

左ページの図を見てほしい。伝統的な学習塾や読書だけではバランスが悪い。スポーツや芸術を習うだけでも不十分だ。その一方で、総合的に子どもの能力を育んできた学校や地域コミュニティの機能は縮小している。

公教育が遅々として手を打たないなか、こうしたニーズを察知した企業家や教育者たちがさまざまなサービスを提供し始めた。危機感を持った人びとが立ち上げた「私塾」や「寺子屋」のようなものも続々と立ち上がってきた。

旧来型の受験塾との主な違いは二つある。第1に、体験を重視し

「生きる力」を養う機能が求められている



ていること。特に失敗や困難、仲間との衝突の体験。そしてそれらを克服して成功体験を身につけさせようとしていることだ。

第2に、暗記や問題を解くことよりも、考えることに特化していることだ。

しかし、「脳を鍛える」「〇〇式教育法」「早期教育が重要」などとおって、低年齢から入会を勧める教室や、休む間もなく複数の教室に通わせる親など、一部ではすでに過熱気味でもある。

本特集では、前述の三つの能力の養成を目指した12の塾等を紹介する。三つの能力にジャンル分けしているが、あくまでも軸足がある分野を示すものだ。アプローチ方法は異なっても、最終目的は生きる力を磨くことにある。

それぞれの教育法は、知見や実績に基づき信念を持って実施されているが、万人に適用可能ではない。子どもの個性を見ながら、その子に合った塾を親が根気よく探していくことが肝要だ。

思考能力を養う

暗記偏重の学校教育に対して、理科実験、数理パズル、作文、野外体験などを通じて「考える力」を養う塾に生徒が殺到している。

サイエンス倶楽部

仮説を立てさせ

実験を通じて検証

毎週土曜日、サイエンス倶楽部（東京都中野区）の自由が丘教室が人居する雑居ビルでは、学年別クラスに分かれた小学生たちが理科の実験に取り組む。

2年生のこの日の実験テーマは「植物」。ピーカーに水を入れ、ベニバナを浸す。色素がよく出ると炭酸ナトリウムを少し加えると水がサフラン色に染まっていく。この溶液を使って、みんなでハンカチを染色する。

5年生のクラスをのぞいてみると、三角フラスコや集気ビンなどの実験器具を使って、二酸化炭素をつくるための実験装置を自分たちで組み立てていた。空気と重さを比べたり、水に溶かしてみたりと、二酸化炭素の性質を知る実験を続けていく。

じつはこうした光景、公立小学

校ではあまり見られなくなっている。低学年では1992年から理科の授業そのものがなくなった。また、理科実験は教材を探したり、道具を揃えたりと準備に手間がかかるうえ、後片づけも面倒なため教員には敬遠されがち。顕微鏡などの実験器具がほこりをかぶったまま使われていない学校も珍しくない。

自分子どもが小学校に通うようになって、初めてこうした事態に気づいた親たちが、サイエンス倶楽部の門をたくケースが多い。

とはいえ、サイエンス倶楽部側は理系の学生を育てるためにやっているわけではない。専務取締役の若林實氏は「勉強をさせるきっかけづくりとしてたまたま理科が適当だっただけ。実験では手や体を動かし、視覚、聴覚、嗅覚など五感すべてを使う。だから、生徒が飽きずに授業に集中するし、感性も豊かになる」。

サイエンス倶楽部の授業では先生が疑問を与え、生徒に考えさせる。たとえば、空気は見えるのか、

先生を手本にしながら実験装置を自分たちで組み立てるサイエンス倶楽部の生徒たち。その目は真剣そのもの



Masato Kato

重さはあるのか。それに対する答えが生徒一人ひとりの仮説となる。それを実験で検証することで、体験的に学ぶことができる。

「暗記ばかりの詰め込み学習をしている子は物事の理解が表面的で、応用がきかない」(若林氏)

生徒をかわせている親からよく言われるのは「ものの方が変わってきた」ということ。たとえば、普段はなにげなく歩いている通学路でふとタンポポを見つけると、なぜここに生えているんだろうと自ら疑問を設定し、その答えを探ろうとするようになる。

現在、教室は首都圏を中心に20カ所あり、生徒数は総勢8100人。授業は月1回(2〜3年生は月2回)、週末に開かれる。

子どもが小学校を卒業した親たちからの要望に応じて、昨年

中学生対象の教室もスタートさせたところ、500人の生徒が集まった。中学生はレポート作成、グループディスカッションなど論理的思考力を鍛える授業内容となっている。こちらも人気が高く今年募集人数を1000人にまで増やす予定である。

国語専科教室

論理的な思考を高め 自己主張力を養う

1997年に国語を専門とする私塾として発足した国語専科教室。学校が夏休みに入ったばかりの7月下旬の授業では、小学生たちが読書感想文に取り組んでいた。

夏休みも終盤にさしかかって宿題の読書感想文に四苦八苦した経験のある読者も多いことだろうが、この教室の生徒たちはさして思い悩む様子もなく筆を進めている。

その秘密は同教室を主宰する工藤順一氏が開発した補助教材「読書感想文おたすけシート」にある。「読書感想文は何をどう書けばいいかわからない。学校の先生もそれを教えない。だからみんな苦しむ」と工藤氏。

おたすけシートの冒頭には誰に向けて書くのかを記入する欄があ

る。両親なのか、友だちなのか、相手によって伝えたい内容も文体も変わってくるはずだからだ。続けて、作者や主人公のプロフィールや本のあらすじ、その本を選んだ理由などをシートの指示に従って書き進んでいけば自然と読書感想文が仕上がるようになっていく。

おたすけシートのほかにも、国語専科教室では作文を学ぶためのさまざまなツールや手法を独自開発している。

なかでも最も有名なのが、読売新聞連載の4コマ漫画「コボちゃん」を題材にした「コボちゃん作文」。漫画を読んでいない第三者にいかにかわかりやすく、簡潔にその内容を伝えるかに挑戦する。1時間に2本、

いなし。習慣を自分力をつけるようになる。宿題もテストもいっさいなし。本を読み、文章を書く。



3本とコボちゃん作文に取り組むうちに、誰が、何を、いつ、どこで、どうして、どのように、という「5W1H」の基本がしっかりと身についていく。

「日本の国語教育では書き言葉」をきちんと教えない。だから、大学生になってもまともな作文が書けない」

工藤氏がいう「書き言葉」とは、状況を客観視して第三者に発信する能力。「日本人は空気を読むのがうまいが、客観的な状況把握や論理的な思考、自己主張などは下手。それは型を知らないからだ」。だから、工藤氏の教室では書き言葉の基本となる型を徹底して身につけさせ、最終的には自ら論理を組み立て、主張できるレベルにまで持っていく。

「日本の教育は学校も塾も先生の言うことに疑問を挟まず、暗記させるだけの受信型だが、もはやそういう時代ではない。ちよつとした教材の工夫で子どもでも論理的思考力は身につく」

国語専科教室が目指すのは、子どもたちが自ら考え、外の世界へ向けて主張する発信型の教育。その理念に共感する親は多く、広告宣伝をしていないにもかかわらず首都圏4カ所の教室は常に入室待ちが続くほどの人気ぶりだ。

アルゴクラブ

世界に広がる数理

センスを磨く「遊び」

「サバが130円、アジが170円、イワシが78円、サンマが104円。4種の魚を1匹以上買った合計が3600円の場合、アジは何匹買ったか」

この問題の正答率、算数オリンピックの決勝戦に進出した小学生も、現役東大生も約19%とほぼ同じ。必要な計算力は小学3年生レベルなので、正誤の差は計算力ではなく「数理センス」の違いだ。受験などの眼前の対策用ではなく、むしろ社会に出た後こそ、数理センスが必要だと痛感しているおとなたちから注目されているのがアルゴクラブだ。

アルゴクラブは「勉強と遊びの壁をなくし、楽しみながら数理センスを磨きたい」という理念からスタートし、教材とノウハウを提供するフランチャイズ方式の教室。四谷大塚などの有名進学塾や筑波大学附属小学校などで続々と導入されている。著名数学者の広中平祐氏やピーター・フランクル氏も開発に参加した7種類のゲームやパズルを利用して、子どもたちの

数理脳を遊びながら鍛える。

メイン教材は0から11まで数字が記載された白と黒のトランプのような「アルゴカード」。各自4枚のカードが配られ、自分の手札とゲームが進行するのに伴い判明していく各カードのありかを分析・推理して他人の手札(数字)を当てる。この「ゲーム」に興じる子どもたちに、勉強しているという意識は皆無だ。「そばに寄ると頭から「キーン」と音が聞こえるくらい脳を働かせているのがわかる」と表現するのは代表の中屋敷俊明氏。

アルゴカードなら、「場合分け」と「条件整理」という算数問題の本質の思考を自然に行っていることになる。ほかにも

首都圏有数の進学塾の四谷大塚でのアルゴクラブの授業風景。低学年のうちから遊び感覚で数理センスを磨く



立方体を組み立てるパズルでは、図形問題を解くのと同じセンスが問われ、自然と3次元的な概念が身につく。

百マス計算が注目され、計算力への関心は高まったが、「サッカーにたとえるなら、計算訓練は走力や体力を高めるランニングのようなもの。アルゴは戦略を立ててゴールをする成功体験を身につけるトレーニング(中屋敷氏)。

グローバル化の進展で数理センスへのニーズは高まる一方だ。設立5年にしてアルゴクラブはアジア4カ国と米国に拡大し、今秋からはカナダでも導入される。ちなみに、冒頭の問題の答えは12匹だ。

花まる学習会 算数脳を育む

ハードな野外遊び

「命は絶対を守る。だけど骨折までは許してほしい」

今どきこんな「常識破り」なことを掲げておきながら、入塾待ちの教室まで登場するほど支持を集めているのが花まる学習会。

中学受験で難関校に続々と合格者を送り込む実績もさることながら、その原動力となっているハ

ドな野外体験教室が人気の秘訣だ。夏と冬に泊まりがけで行われる合宿は、17年前に20人乗りのマイクロバスでスタート、いまや毎年2000人以上が参加している。

代表で冒頭の言葉の発言者でもある高濱正伸氏は、図形やパズルを使用した算数ドリル「なぞべー」の開発者として知られる。さまざまな考える力の総称として提唱している「算数脳」を養成する教育法で、全国的に知られた教育者だ。高濱氏は、算数脳を養成する最高の教育素材は野外にあると断言する。「野外活動をやりたくて塾を始めたようなもの(高濱氏)。

野外活動では勉強はせず、とことん遊ぶ。前述のように、ある程度のケガは覚悟のうえで、夏なら川、海、山と複数のコースに分かれサバイバルを経験する。このときの危険や不自由を克服した成功体験が、子どもたちの困難や難問へ取り組む「意志力」となる。

しかし、高濱氏が野外活動を重視するのは根性論からではない。「今日の子どもは自然のなかで五感をフルに使って遊ぶ体験がないそれが考える力の低下の原因」と確信しているからだ。

考 える力の差が最も出るのが図形問題。補助線を思いつく力、視点や発想を変える力、空

秘密基地づくりでも、子どもは空間認識力やイメージ力をフル回転させる。外遊びの体験量が考える力の差になる



間を認識する力、問題に対して試行錯誤する力の差だからだ。これらの能力の差は何が原因か。「木登りでの枝に足を置くか、秘密基地を作るのにどのような長さの材料を組み合わせるかといったことの積み重ねであり、外遊びの体験量で決まってくる」というのだ。20年以上前、大学受験予備校で教えていたとき、伸びる生徒ほど図形問題が得意なことに着目。その後、外遊びが上手な子ほど補助線をすぐイメージできるなど図形問題が得意なことを発見した。体を動かすときだけでなく、たとえば合宿でさまざまな年齢の子どもたちが、川で遊ぶことになれば、まず上級生は状況を判断し、全員で遊べるルールをつくり、下級生にわかるようにしていねいに説明する努力をする。これは国語的思考能力の発達に直結している。

自律能力を養う

志を抱き、立ち向かえる力。おカネと上手に付き合える知識。文武両道の総合力。バランスの取れた人材育成が注目されている。

デルタスタジオ

挑戦し、考え、学び 才能を開花させる

「モーターは動く？ 動かないときは、どうすればいいのかな？」。小学5〜6年生の男女7人が、モーターの仕組みを教わった後、実際にそれを作っている。「エンジンはこちらのとき、どうした？」。先生が問いかけると、「なぜ動かないのか、とことん考える」「もう一度やり直す」……子どもたちは次々と答える。前週までにエンジンの伝記を読んでいるからだ。

この授業は、エンジニア入門。モーターの仕組みや飛行機が飛ぶ原理などの基礎知識と並行して、「エンジンやライト兄弟などはどう生きたか。いかに壁を乗り越えたか」といった先達の経験や知恵を学んでいく。週1回2時間、約10週で1プログラム、年間5プログラム、4年生から始めて小学校卒業までの3年間で最大15プロ

ラムが受けられる。

ほかにデザイナー、政治家、医者などさまざまな職業を学ぶ。実際に、その職に就く人が講師になることもある。

主宰するデルタスタジオの代表は、渡辺健介氏。世界有数のコンサルティング会社マッキンゼー&カンパニーを辞め、初めて執筆した『世界一やさしい問題解決の授業』がベストセラーになった。

当初は著書のタイトルと同じように、問題解決の方法を教えているが、その後、さまざまな体験を通じて好きなものを見つけてきかけや、社会に出てから必要な力を身につけるための教育に幅を広げていった。

根底には自身の経験がある。米イエール大学に入学し、教養課程の授業で初めて建築を学び、強く魅かれた。「中学、高校の頃に建築の世界を知っていたら、そ

Toshiaki Usami



テーブルを囲んでモーターを作る(上)。自動車を改造した店でビジネスの体験をする子どもたち(下)

の道に進んだかもしれない」という思いがある。

「人が自分の才能や興味を開花できれば、本人も社会も幸せだろう。そのためきつかけを子どもにつくりたい」と渡辺氏は言う。

学

ぶ場所や教わる人は、教室や先生ばかりではない。

ビジネスのプログラムでは、手づくりホットドッグ類の販売を体験する。原材料を仕入れ、コストを計算し、利益が残る値付けをして、街中で販売する。なかなか売れず、子どもたちは商売の難しさを実感。ファストフード店に行き、店の経営方法を学ぶ。教わったことを生かし、後日もう一度、販売してみる。

すべての授業は単

なる体験で終わらせず、プロや達人の経験を学び、成功するには何が必要かを考えさせる。

いくつもの困難を乗り越えることで、「自信を持たせたい。自分の体験や考えを、自分の言葉で話せるようになってもらいたい。そして、未経験のことに挑戦するためらしいの気持ちを減らしていききたい」と考える渡辺氏。子どもたちに感想を聞くと、「大変だけど、楽しいよ」と答えが返ってきた。

バツカーズ寺子屋 財界有志がパトロン 少数精鋭で志士育成

戦後の日本の教育に危機感を抱いた54人の財界人が、私費を投じ

て設立した私塾が「バツカーズ寺子屋」だ。

「将来の日本のリーダー、世界に通用する人材の育成」を、バックアップする趣旨から名づけられた。設立メンバーにはセコム創業者の飯田亮氏や麻生グループ代表



の麻生泰氏をはじめ、そうそうたる財界人が名を連ねる。

塾生は基本的に20人。10〜15歳を対象にした入塾面接では「志」が問われ、晴れて合格すると1年間のプログラムのメインは座学、企



「パトロン」の経営者が資金でも教材でも協力。企業訪問（上）と「志」を学ぶため松下村塾のある萩市での合宿（下）

業訪問、合宿だ。座学では歴史や文学、礼儀などを学ぶ。毎回、メンバーの企業経営者がゲスト講師となり講演を行い、「どんなおとなになりたいか」といったテーマでディスカッションを行い、自分自身のビジョン確立を目指す。

メンバー企業を訪問しておとなの仕事場を見学するのもバツカーズの特徴だ。タクシー会社では、タクシーの助手席に同乗して厳しい職場にじかに触れたりもした。

維新の志士たちのような「志を持つ」ことを重視するだけに、合宿も吉田松陰の松下村塾のあった山口県萩市へ行く。高杉晋作や伊藤博文らが歩いた約30キロの道（萩往還）を歩き、心身を鍛錬する。

プログラムは終始、インプットと同量のアウトプットが求められ、

投資に関して学ぶ子どもたち。
貯金、ローン、投資など社会
生活に不可欠なおカネの知識
だが、学校で学ぶ機会はない



特にスピーチが重視される。

「自らの言葉で意見を発すること
が、リーダーには欠かせない資
質」(委員の関家憲一氏)だからだ。

キッズ・マーケット ・キャンプ

見直される金融教育 貯金や借金から学ぶ

「お金を貯める」「お金を借りる」
「証券投資を考える」

こうしたおカネに関する習慣や
知識は実生活で最も重要なスキル。
しかし、いつさい習わないまま社
会に出た結果、おカネに振り回さ
れたり、マルチ商法に手を出した
り、経済合理性に沿わない行動に
出たりしている人は多い。

かつては、おカネに関する話を
子どもにするのを避けてきた風潮

があった。だが、時代は変わった。

NPO法人の金融知力普及協会
が2004年から小学5年生〜中
学1年生を対象に、春・夏休みに
実施する金融教室の「キッズ・マ
ーケット・キャンプ」も、子を参
加させたいと希望する保護者が年
々増加。30人の定員に対して毎回
約5倍の応募者が殺到している。

冒頭に並んでいるのは講義のテ
ーマ。ほかに「ライフプランを作
る」「リスクとリターンを考える」
など、おとなでも聴きたいと思わ
せる全9回の講義がある。座学に
加え、日本銀行や東京証券取引所
の見学、企業経営者の講演などが
行われ、おカネの動きを実感する。

後半の講義ではインターネット
でいくつかの有名企業の10年分の
株価チャートを見比べ、「なぜA社
は株価が上昇し、B社は下落して
いるのか」を考える。トヨタ自動
車のチャートを見た中学生は、「ハ
イブリッドカーを開発したから株
価が上がったのでは」と、かなり
的確な分析をしていた。こうした
初歩的なファンダメンタルズ分析
も行い、株式の概念を養う。

同協会事務局長の鈴木達郎氏は
「セミナーで教えられるのは知識
と概念。家庭では、お小づかいの
範囲でムダづかいなどの失敗も含
めて体験をさせてほしい」と言う。

体育家庭教師

逆上がりを個人指導 「文武両道」も強まる

「逆上がりができない」「駆けっこ
が遅い」。子どもの世界では、一
大事な「運動コンプレックスを抱
える子どもはクラスに少なからず
いるものだ。かつてなら放課後に
仲間と練習したり、近所の公園で
上級生や親に教えてもらったりし
て克服していた。あるいは、運動
への劣等感を抱きつつも、自分な
りに克服して成長していった。

今日の子どもは、こうした練習
の機会が激減している。一方で子
の劣等感を除去してあげたいと思
う親は増加。こうしたニーズが生
み出したのが体育系の塾だ。

その一つであるスポーツティワン
は、体育の教室指導と個別の体育
家庭教師派遣を事業の両輪として
いる。社長で体育大学出身の水口
高志氏は、「体育が苦手な子は技術
不足もあるが、メンタル面に問題
があるケースも多い」と指摘する。
そして、プロが正しい指導法で
教えれば効率よく「悩み」を解消
していけるという。その過程で克
服体験や自信を身につけることが、
子どもたちの大きな財産となる。



鉄棒の個人指導の授業風景。
コンプレックスの解消だけで
なく、体育でも好成绩を残し
たいという目的の子も多い

「運動会のリレーで勝ちたい」と
いった前向きなリクエストもある
が、それこそ専門の指導法によっ
てフォームなどを改善、「1回指導
しただけで1秒早くなることもザ
ラ」だという。ほかに「自転車
に乗れるようにしてほしい」とい
う驚くべき依頼も少なくない。

こうした体育指導の需要増の
背景で、見逃せないのは私
立小学校の台頭。私立小学校の入
試に出る指示行動やスキップなど
の練習に来る幼稚園児と、文武両
道を謳う私立小学校へ通う生徒た
ちが増えている。

さらに「勉強も運
動もできるバランス
のよい人間が理想と
いう『総合力』志向
が強まっている」と
水口氏は指摘する。

協調能力を養う

学校や地域コミュニティの機能低下でコミュニケーション能力を身につける機会が減少した。それらを代替する塾などを紹介する。

鎌倉てらこや

群れ遊びを再現

地域が支える寺子屋

毎週土曜午前、神奈川県鎌倉市の大船駅前の雑居ビル3階に、小学生が嬉々として集まって来る。

その先は、平成の寺子屋。NPO法人鎌倉てらこやが2003年から運営する。会場は地域の協力が提供し、大学生を中心としたボランティアがサポートする。

午前の2時間は自習時間。学校の宿題でもドリルでもなんでもいい。各自持参した教材に取り組み

る子どももいる。わからない問題は大学生や上級生が教えてくれる。昼食を挟んで午後の2時間はとにかく遊ぶ時間。目下のブームは水風船のぶつけ合いだ。室内に残った子どもたちはボードゲームに興じていた。とにかく、学校も年齢も異なる子どもたちが学生を触媒として、群れて遊ぶ。

早稲田大学大学院生で事務局次

長の小木曾駿氏は、「かつての地域コミュニティにあった、年齢を超えた群れ遊びを再現した」と狙いを語る。遊ぶだけではなく「集団の力で自然と机に向かう」という。



子

ども同士のケンカは日常茶飯事だ。一人っ子も多く、年上や年下とのケンカが初体験の子もいる。「無理に仲介せず、子ども同士で仲直りや折り合いをつけることを経験させるようにしている」(小木曾氏)。

子どもを通わせている親の一人は、「苦手だった上級生との会話もできるようになった」と喜ぶ。

地域の協力者も多く、子どもたちは陶芸や日本画、稲作などを体験させてもらえる。寺、神社、教会も、宗派を問わずサポーターだ。

8月には最大イベントの建長寺での夏合宿が始まり、座禅も行われる。こうして、子どもは地域に育てられる。

建長寺で行われる夏合宿での座禅。てらこやを中心にボランティアや地域コミュニティも活性化しつつあるという

体験型旅行

8割の子が単独参加
貴重な共同生活体験

「宇宙飛行士の野口聡一さんや山崎直子さんの活躍で、今年は宇宙飛行士体験のツアーが人気です」と語るのは日本通運の旅行部門である日通旅行で、子ども向け体験ツアー企画を担当する斎藤正明氏。

筑波宇宙センターへ行き、宇宙飛行士が実際に行った船外活動訓練や閉鎖環境適応訓練を体験して科学への興味をかき立てる。ただし、このツアーの重要な狙いは、宇宙飛行士に最も求められる協調性やチームワークの重要性を理解することだ。

年齢の異なる子ども同士の付き合いや、共同で作業することなど、かつては地域コミュニティや学校、あるいは家庭が担ってきた機能を、それらに代わって今日提供している事業者の一つが旅行業界だ。

「職業体験をさせたい」「大自然に触れさせたい」「不自由を経験させたい」など、子ども向けツアーに参加させる保護者にはさまざまな狙いがある。

共通する目的は、初めて会う学校も年齢もバラバラな子ども同士



日通旅行が企画した宇宙飛行士体験ツアー。科学的好奇心を満たすだけでなく、チームワークの大切さも学ぶ

でコミュニケーションを取り、共同作業や共同生活の場で協調することを体験させることだ。「体験ツアーは8割が単独参加。友人同士で参加しても、大半の親が『班は別々にしてほしい』と頼む(斎藤氏)という。

一人っ子の増加でこうしたニーズは増えている。日通旅行に限らず他の旅行事業者でもこの種のツアーは年々充実してきている。

インターネットで「子ども体験旅行」などの言葉で検索してみてもほしい。離島でのサバイバル体験、北海道のリゾートホテルでのホテルマンとパティシエの体験など、バラエティに富んだプログラムが無数にヒットするはずだ。

JCCQバイリンガル幼児園

英語・中国語、音楽、体操
3歳からの総合学習

2008年に開園したJCCQバイリンガル幼児園(東京都中央区)は、0〜5歳児を対象に語学教育、知育教育を中心としたユニークなカリキュラムを組む。

東京大学を卒業後、米スタンフォード大学でMBA(経営学修士号)を取得、イーバンク銀行(現・楽天銀行)を立ち上げるなど起業家としても知られる理事兼園長の若山健彦氏は「国際化時代を考えるとゆとり教育では心もとない。語学や音楽、体操など幼児のための総合的な学習環境の必要性を感じた有志が集まり、当園を立ち上げた」と設立の狙いを語る。

英語の授業は毎日必修。中国語は3歳児から週1回必修、午後3時以降のオプションプログラム(別料金)を組み合わせれば週3回学ぶことができる。

語学の授業はすべてネイティブの教師が担当。英語と中国語を合わせて計8人の教師がいる。

もちろん、それ以外にも保育士や幼稚園の教員資格を持った日本人職員が12人いて、子どもたちを

しっかりケアしている。

語学の発音やヒアリングは幼児期ほど習得が速いといわれるが、JCCQの園児のうち年少から年長生までの7人が09年、国連英検ジュニアテストで、小学4〜6年生のレベルに相当するB1級に合格毎日、生きた英語に触れている成果を証明した。

国や自治体の認可を得ようとすると語学教育の時間などが制限されるため、JCCQは株式会社方式の無認可保育所となっている。基本保育時間は午前9時〜午後5時。保育料は週5日で月額8万8000〜9万8000円と安くはないが、時間当たりに直すと最大580円

ネイティブの教師は日本語をいっさい使わず、英語だけで授業を進めるが、3歳児クラスでもヒアリングは完璧だ



M.K.

夢中になってレゴで“学ぶ”子どもたち。自分の作品について発表することで、表現力やプレゼン力も養われる



程度。基本時間内にピアノやバレエ、空手などをオプション料金で習わせることができるのも人気の秘密となっている。

レゴ教室

創造力や空間センス、プレゼン力も伸びる

デンマークが生んだ「レゴ」。携帯ゲームよりも、創造力や空間認識力が高まりそうなブロック玩具で遊んでほしい——そんな願いを満たしているのが、全国12教室で展開されているレゴ教室だ。3歳から10歳までを年齢で分け、レゴを使ってさまざまな能力を養っ

ている。

レゴ本社が製作した世界共通の教育プログラムと、専用開発されたレゴの教材キットを使用。組み立ての過程で創造力はもちろん立体や力学の概念も身につく。上級生は滑車やテコ、モーターなどのキットを使用することで理科学分野の能力を養うこともできる。

レッスンでは、たとえば動物園などのテーマに沿って指導員のアドバイスを交えながら自由に作品を組み立てる。遊びがベイスだけに子どもたちはほかでは見せない集中力を発揮、創意工夫と達成感を体験する。そのうえで、無限の組み合わせがあるレゴなので、正解は一つではなく個性も磨かれる。劣等生も出ない。

じつは、そうした能力以上に養われるのがコミュニケーション能力や表現力だ。作品をグループで作ることで協調性が養われる。レッスンの終盤では作品の発表会があり、子どもたちは人前で、自分が考え、形にしたものを伝える訓練を自然と重ねることになる。

幼児が「大好きなキリンを作りました。首が長いので背の高い小屋と、エサ入れを高い場所にする工夫をしました」と生き生きと発表する姿は、レゴを教材に使用すればこそその光景だ。

家庭で子どもの生きる力を養うことも、もちろん大切だ。

デルタスタジオ代表の渡辺健介氏が披露してくれた、ノーベル物理学賞受賞者のリチャード・P・ファインマン氏が父親から受けた教育のエピソードはヒントとなる。

ファインマン氏の父親は一緒に百科事典を調べ、恐竜の体長が8メートルと記載があれば、「頭はこの窓くらいか」「頭を突っ込んできたら窓は粉々になるかな」などと問いかけ続けたという。こうして「知識」ではなく、「自分の頭で考えるクセ」をつける教育をしてきた。

また、鳥を見つければ、「リチャード、あの鳥の名は英語でA、ポルトガル語でB……」と数カ国語の呼び方を教えた後、「これで、お前はすべての言語であの鳥の呼び方を知ったが、あの鳥自体に関しては何にも知ったことにならない」と言い、「さあ一緒に観察しよう」と誘ったという。「考えさせること」「観察すること」は今回収材した塾でも共通している重点課題だ。それを家庭で行うための親の役割は、問いかけることだ。

問 いかける場合も、「興味を増幅させる」ように誘導する工夫が必要である。たとえばレゴといえども幼児は気が向かないとやらない

家庭で養う生きる力 親の役割は「問いかけること」

し、すぐ飽きる。レゴ教室の須藤みゆき氏は「絵本を読み聞かせ、そのシーンを作らせると子どもは夢中になる」とアドバイス。家を作らせて、「台所も付けて」と頼むと、自宅の流し台やコンロを観察し出すという。

4コマ漫画を読み、そのあらすじを文章化させる国語専科教室の学習法も、親子で楽しみながらできる。

協調や自律の能力を養うには、多くの「場」を踏むことが不可欠だ。自治体やNPO団体が無料か低料金で運営・企画する体験旅行やサークル活動は数多くある。問い合わせてみる、見学に行くなど、まず親が第一歩を踏み出す見本となる。



頭をフル回転させ人生ゲームに興じる子どもたち。近所の友だちと遊ぶことも重要なこと